

平成31年3月21日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880181

氏名 水工 泰裕

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 アラバマ州バーミングハム (国名 アメリカ合衆国)
2. 研究課題名 (和文) : 自発的に嘘の可能性に気づく心理的機序の解明：疑いを測定する新たな方法の開発
3. 派遣期間：平成30年 9月30日 ~ 平成31年 2月21日 (144日間)
4. 受入機関名・部局名：Department of Communication Studies, University of Alabama at Birmingham
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先では受け入れ教員である Dr. Timothy Levine の指導の下、4つのプロジェクトに従事した。

① US Custom の欺瞞検知に関する検討：人々は非言語行動からではなく事実照合によって嘘を見抜いているとした Park et al. (2002) の研究結果が、欺瞞検知のプロフェッショナルである US Custom においても再現されるのかを検討した。Dr. Levine が事前に取得していた US Custom に行ったアンケートデータの解析を、Dr. Levine と議論しながら主に申請者が行った。

② A few prolific liars の日本における再現性検証：人間全員が等しく嘘をつくのではなく、多くの嘘をつく人が少しだけ存在するという「A few prolific liars (Serota et al., 2010)」の現象が、日本でも再現されるのかを検討した。渡航前に申請者が取得したデータを Dr. Levine とともに議論、解析を行った。

③ 自発的欺瞞検知に関する研究：真偽判断を迫ることなく欺瞞性認知の測定を行えるかを検討した。申請者がアイトラッカーを用いて日本で測定したデータを Dr. Levine とともに議論、解析を行った。議論をもとに実験計画を修正し、帰国後に再度データを取得する予定である。

④ 大規模欺瞞検知に関する研究：Dr. Levine を通して知り合った Universidad de Salamanca (スペイン) の Dr. Jaime Masip が取得したデータを申請者が解析した。未発表のため詳細は記述できないが、3人の共同研究となる予定である。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

それぞれのプロジェクトの進捗状況は以下のとおりである。

- ① すでに *Communication Research Reports* 誌に採択され掲載済みである。申請者はセカンドオーサーとして主に分析および結果部分の執筆を担当した。(書誌情報: Levine, T. R., & Daiku, Y. (2019): How Custom Agents Really Detect Lies, *Communication Research Reports*, 36, 84-92, DOI: 10.1080/08824096.2018.1555523)
- ② 2019年2月上旬に行われた *Society for Personality and Social Psychology* の年次大会で発表を行った。分析は完了しており、現在は投稿論文のドラフトを書き上げ Dr. Levine のチェックを受けている最中である。申請者をファーストオーサーとし、この研究のオリジナルの著者である Dr. Kim Serota (Oakland University) も含めた3人の共著として投稿予定である
- ③ Dr. Levine の提唱する Truth Default Theory を補う重要な研究であるため継続予定である。帰国後、留学中の議論を元に実験刺激の再作成等細かな修正を行い、再度データを取得する予定である。2019年度中の学会発表を目指す。
- ④ 分析の方向性は留学中にほぼまとまり、分析プログラムの微修正は必要なものの、学会発表可能なレベルで分析は完了している。2019年度春に学会発表を行う予定である。Dr. Masip と3人の共同発表となる予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムの支援を受けて行った滞在は、以下の点において非常に有益なものでした。

まず、何よりも欺瞞研究の世界的権威である Dr. Timothy Levine の元で細やかな指導を受けられたことです。幸か不幸か、現在 Dr. Levine の下には博士後期課程の学生が在籍していなかったため、マンツーマンで丁寧な指導を受けることができました。常に同じ部屋に自分の研究分野の世界的権威がおり、何でも質問に答えてくれる環境は、研究を進める上で最高の環境であったことは間違いありません。さらに、滞在先には Dr. Steve McCornack や Dr. Kelly Morrison などの著名な欺瞞研究者が在籍しており、彼らにアドバイスをもらう機会も多くありました。

また、Dr. Levine は日本から来た私を常に気にかけてくれ、本プログラムの申請課題以外にも、様々なプロジェクトに関わらせてくれました。すでに出版された US Custom に関する研究や、現在進行中のスペインの Dr. Masip との共同研究は、Dr. Levine が私を誘ってくれ関わることになったものです。共同研究においても、私を学生ではなく一人の共同研究者として扱ってくれ、私の進言に真摯に耳を傾けてくれるため、多くの忌憚なき議論を行うことができました。

また、研究以外にも様々な活動に関わることができました。その中でも特に有益だったのは、大学が開講している無料の ESL でした。毎週、外国語として英語を教えるプロに発音などを学べたことは、私の英語力向上の大きな助けになったことは間違いありません。また、日本語学科の高宮優実先生、岩佐友子先生が開講していた日本語の授業の TA をしたりすることで、多くの現地の学生と友人になることもできました。帰国間際には、高宮先生の依頼を受け、日本とアメリカに関する文化心理学の Scholarly Talk を現地の学生の前で行いました。60分間すべて英語で発表、質疑応答をするのは初めてで大変緊張しましたが、貴重な経験でした。

その他にも、アラバマ州という日本人がほとんどいない土地に単身飛び込んだ私を様々な人が助けてくださり、ここには書ききれないくらい様々なものを得ることができました。心より感謝申し上げます。